

佐藤重夫と巖島民家「写真・図面集」
(その1 岩村家(旧・江上家)、江上家)

河村 明植

Shigeo Sato and Itsukushima Folk House “Photos and Drawings” :
Part 1, Iwamura family (former Egami family), Egami family
Meishoku KAWAMURA

巖島は本学会元会長の佐藤重夫先生(以下敬称略)の思いのたいへん深い地で、昭和40年代から昭和60年代にわたって巖島民家の調査・研究を行っている。昭和45年に「巖島門前町の家並みの調査研究Ⅰ(景観的研究)」(建築学会中国支部研究報告3月号)、昭和47年に「巖島の民家(第2報)」(日本建築学会中国・九州支部 研究報告第2号)を発表した。

佐藤の残した民俗建築アーカイブ資料「巖島民家 写真・図面集」に、数多くの巖島民家の写真と図面があった。巖島民家の写真は、昭和46年と昭和59年に撮影したものがあり、昭和46年の巖島民俗総合調査時に撮影されたものと、昭和59年から昭和61年まで宮島町文化財審議委員をしていたので昭和59年の写真はこの時のものではないかと思われる。巖島の民家を実測調査し図面を作成したのは昭和60年～62年の3年間にわたっての作業で、当時は広島工業大学の嘱託教授をされていた頃で、建物の実測・作図作業は広島工業大学の学生の協力を得て行われたようである。巖島民家の図面は「宮島町史 特論編 建築(宮島町 平成9年6月)」に掲載されている町家実測図と照合したところ、ほとんどが同じ図面であり宮島町史の基となった実測図の原図であった。

本稿では佐藤が調査した巖島民家について、下記の「資料1～資料3」に基づいて7棟の巖島民家を3回に分けて紹介することにした。今回は1回目の報告である。

(民俗建築アーカイブ 3回の連載予定)

- ・その1(本号):^⑱ 岩村家(旧江上家)、江上家
- ・その2:^⑳ 元・石田家、田中家、熊田家
- ・その3:^㉑ 吉田家、宮豊家/倉庫

【資料】

- 1) 「巖島の民家(第2報)」(日本建築学会中国・九州支部 研究報告第2号 昭和47年3月) 佐藤重夫
- 2) 民俗建築アーカイブ資料 佐藤重夫「巖島民家 写真・図面集」
- 3) 「宮島町史 特論編 建築」宮島町 平成9年6月

1. 宮島門前町について

現在、宮島では伝統的な町並み保存や整備への関心が高まり、令和元年6月、廿日市市宮島町伝統的建造物群保存地区が決定され、さらに国の重要伝統的建造物群保存地区の選定につながる取り組みがされている。

古代の宮島は神職や僧侶でさえ島に渡るのは祭祀の時のみで、島に上陸する際も厳重な潔斎が必要であった。宮島信仰が世に浸透していくにつれ祭礼・法会に参集する参詣者が増え、鎌倉末期になると神職や僧侶、室町期には役人や庶民が住み始め、町が形成されていった。戦国時代には、西町が神官・供僧の居住地、東町は一般の商工業者の居住する地域となる。江戸期には、港町・商業の要として繁栄するにつれ、祭礼・法会に合わせた参詣も盛んになり、市が開か

れ歌舞伎・富くじなども行われて多くの人で賑わう観光の町となっていき、門前町として東町の拡大・整備が埋立てを伴いながら行われた。宗教機能を集約した社家町である西町と港湾商業町である東町が互いに補完しあい、連帯した門前町を形成していた。

【注記】島名については「宮島」・「巖島」と両方使
用されているが近年は「宮島」と呼ばれる方が多い。
佐藤の資料には「巖島民家」と明記されているので
本報告の佐藤の資料にはこの名称を使用する。

2. 「巖島の民家（第2報）」（日本建築学会中国・九州支部 研究報告第2号 昭和47年3月）佐藤重夫

(I) はじめに

巖島の民家については、昭和36年3月発行の広島県建築士会誌「建築ひろしま」第10号に岡田貞治郎氏が発表されており、その概要をよく知ることが出来る。また巖島門前町の家並みについては建築学会中国支部研究報告、昭和45年3月号に拙稿で発表して来ており、巖島の民家発生等については今回はふれない。

昭和46年度において巖島民俗総合調査を多くの方と共に行ったので、その際に特に歴史的にも古く、また復原調査を行うにあたって、比較的に原形がよく解る、いわば代表的な民家5戸を選んで、その復元的調査研究を行った。この5戸は当然のことながら町屋建であり、いろいろの規模のものを選ぶように考えたが、多くの事情から、それは次回にゆずることとした。

この宮島の民家は他の城下町や、門前町とことなり、有の浦の汀線にそって、（もともと神社の西方、および南側に社家などのいえがぼつぼつと出来たのに続いて）自然発生的に次第と北東方へと建並ぶに至ったものであるから、間口が5m前後のものが圧倒的に多く、それに次いで、7.5mないし8mといったものが多く、奥行は20mないし30mといったものが大部分である。しかもその形は不揃いであり、有の浦の汀線の曲りなりに屋並が発達したので、土地も狭く、したがって隣家との間には全く隙間のない屋並になっている。こういったことも原因して巖島の民家にはまたこの特徴がある。この調査の目的もまたこの復元的調査によって巖島民家の民家史上の資料を確立しようとするものである。

(II) 今回の調査は岡田貞治郎氏および石原、田村、募原の3学生の協力を得て行ったものである。実測家屋は次の5戸である。

- | | |
|--------------------|------|
| (1) 田中吉兵衛家 | 幸町西表 |
| (2) 吉田(利)家 | 北之町 |
| (3) 元 石田家(稲田栄次郎所有) | 滝町 |
| (4) 江上家 | 大西町 |
| (5) 元 岩村別荘(旧江上家) | 大西町 |

このうち(5)の旧江上家は比較的大きな家屋で醸造家であり、一般的といえない面もあるので、今回のこの報告から除外することとした。

復元的実測調査は技術的資料、(痕跡、工法、新旧の比較等)により行ったもので、図面は現状と復原の双方の平面、立面、断面、軸組、梁組等を採取したが、本報告ではそのうち平面図のみを掲示した。以下それぞれの家について説明しておく。

(III) 田中家 ……記述、平面図(現状・復原)

(IV) 吉田家 . . . 記述、平面図（現状・復原）

(V) 元 石田家 . . . 記述、平面図（現状・復原）

(VI) 江上家 . . . 記述、平面図（現状・復原）

(VII) おわりに

以上で厳島の比較的代表的と思われる4戸の古民家の復元的調査の概要を述べたが、これには多くの図面と写真が附属しており、頁数の関係から、その一切を省略したので、まことに不十分で意を盡せないものである。別に詳しくは発表の機会があるものと思うのでとされたい。

最後に実測調査にあたり便宜を与えて下さった宮島町、および宮島町教育委員会、ならびにそれぞれの御家庭に対し厚くお礼を申し上げますのである。(47.2.19)

※上記の(III)～(VI)の民家の記述・平面図は、各民家を説明する項で掲載する。

3. 民俗建築アーカイブ資料

佐藤重夫の「厳島民家 写真・図面集」

佐藤が残した民俗建築アーカイブの厳島民家資料は、26棟の町家の写真・実測図面であった。佐藤が調査した厳島民家の場所を「図1」で示し、「厳島民家 写真・図面集」のリストを「表1」に掲載した。

4. 岩村家（旧・江上家）〈現・宮島歴史民俗資料館〉

（写真・図面集リスト No.1）

- ・ 建築年代：19世紀前期（江戸後期）
- ・ 建築形式：厨子2階建、切妻造、棧瓦葺、平入
- アーカイブ資料：写真55枚（白黒）〈昭和46年撮影〉

大西町にある宮島歴史民俗資料館は、もとは江戸時代後期から明治初めにかけて栄えた醤油の醸造と質屋を営む商家の江上家で、明治41年に江上家から岩村家が譲り受け別荘とした。昭和46年に宮島町が譲り受け、一部を補修改築して資料館となっている。

佐藤が広島県民家緊急調査においてこの建物の調査を行っており、その報告書を紹介する。

(1) 広島県民家緊急調査報告書「広島県の民家」1978年 広島県教育委員会

旧江上家住宅

所有者 宮島町（宮島町立歴史民俗資料館）

この建物は旧江上家（後に岩村家別荘）で、敷地は大西町の一郭約500坪（約1,650㎡）の構、四方道に囲まれた格好の地である。

宮島町大町の吉田家所蔵（天明三年銘記）の宮島町の町割図には、この敷地の一郭はまだ数軒の家に分けられているから、現在の建物は天明以降の建物である。一説には弘化頃の格之介氏の代に建てられていたともいわれていた。この建物の創建についてはよく判らないが、その主屋の他に土蔵4棟（内1棟は焼損廃棄）と、それに平庭までよく残っていた。先般、中の間と座敷境の欄間建具の一部破損した部分を修理するため資料館員が取り外したところ、次の様な墨書名が出た。「天保四年癸巳七月吉日大西町糺屋清五郎調之」とあった。前述の弘化頃の格之介氏の代に建てられたとも伝えられる説に符合する。よって、天保、弘化頃の建物であることにほぼ間違いない。ただし、この欄間が周囲の木材と古色の合わないことに多少の疑問が残る。

現在の建物は資料館にする時に、東及び南側それぞれ道路に接していたのを後退した。建物は平家造り（一部物置風二階付）棧瓦葺である。外観は東南隅を土蔵造り（内部は普通真壁造り）とし、別棟の格好で本屋へ続く、更に奥の座敷と旧仏間は、梁間が狭いので、棟高を一段低くして表通りを揃えて建てられている。本屋の部分表外観は宮島通例の装飾工法で、長い軒出を支えるべく持送り付、腕木構、子天井付であるところと出格子構で飾る。その下の階下の庇が古風な柿葺でこれも出桁造りで、化粧裏板を厚板とし樋を欠く、柱間装置は荒い格子組、出入口に大戸を構える。正面西（左）の方は高い瓦葺で、腰板張りの古風な塀が敷地いっぱい続く。

街並の大きな商家の一形式として通り庭がある。入口を入った所の土間は鰯天井で、上は質草（江上家醤油製造と質屋であったという）の格納場であったらしい。土間の中の間及び奥の間は曝し小屋で小屋組が全部見える。野地は竹小舞の「エツリ」で古風である。中の中の左側座敷に上がる所に式台風の縁があり、丈の高い框の上に紙張障子が建てられているが、その外側に一本溝があって、戸が建てられるようになっている。こんな形式は民家として古い形式と聞く。主屋表通り部屋の外が現在は堅格子造りになっているが、もとは板戸締で上が内側への桔上げ、下は落とし込みの、山口県府地方にある部帳（フョウ）に似た構造である。平面は、やや複雑であるが、江戸末期の建物として当然の構想と思われる。

5. 江上家（大西町）（写真・図面集リストNo.3）

【現存せず】

- ・ 建築年代：19世紀前期頃
 - ・ 建築形式：間口4半弱、奥行5間、厨子2階建（一部2階改築）、切妻造、棧瓦葺、妻入、1階板庇
- アーカイブ資料：写真16枚（白黒）

大西町の福田家と津田酒店の間にあった民家で現在は解体されている。屋根の軒はせがい造で1階庇の出ともかなり深い。1,2階には透かし彫りの雲形模様の持送りが備わっている。左右は別々の建物のように見えるが同一建物で左側部分のみ2階増改築されている。1階の板庇は連続している。

(1) (資料1)「巖島の民家（第2報）」日本建築学会中国・九州研究報告第2号 昭和47年3月

佐藤重夫

(VI)『江上家』

この家も古式をよく遺す例であるが、比較的にかたい形の例である。つし2階が大きく、それが後補で屋根全体を上方にあげて、高い二階に現在なっている。しかし、土間上部のみは旧態を遺した2階になっており、柱の各所の痕跡から旧状をややたぐることが出来る。しかし、ざしきの上部など、部材が大きく替えられていて復原困難なものもある。表側二階（土間上部）などに古式が残存しているものである。

(2) (資料集2) 民俗建築アーカイブ：写真 佐藤重夫（昭和46年）

「民俗建築アーカイブ」の写真・図面をご希望の方は下記へ申し込んで下さい。無料で提供します。

民俗建築アーカイブ[®]執筆担当 河村明植

meishoku_kawamura <myo_yo_kawamura@ybb.ne.jp>